戦後の作家と作品

佐々木基一

未來社刊

戦後の作家と作品

1967年6月30日　第1刷発行

定 価　650円

© 著者　佐々木基一

発行者　西谷　能雄

発行所　株式会社　未来社

東京都文京区小石川3—7
振替・東京87385　電話(814)5521

ふじ活版／萩原印刷／今泉誠文社製本

乱丁・落丁本はおとりかえします

戦後の作家と作品　目次

野間　宏……五
武田泰淳……二四
椎名麟三……五九
大岡昇平……九三
野間宏・武田泰淳・大岡昇平・三島由紀夫……一一三
堀田善衛……一三五
安部公房……一五六
長谷川四郎……一八一
開高　健……二〇四
原　民喜……二一八
田中英光……二四八
花田清輝……二六〇
平野　謙……二七四

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

戦後の作家と作品

野間　宏

『真空地帯』について

野間宏の『真空地帯』が、旧日本軍隊の機構と実体を、かつてないほど細密に、ヴィヴィッドに描きだした作品であることには、世評がおおむね一致している。そして、この作品はそのようなものとして一般に読まれているようだ。

「二等兵から上等兵へと敗戦に至る四年余りを内地部隊の一兵隊として送ってきた私は、作者の逞ましい、執拗な表現力が、むしろそのディテールの端々によって、私の心理や生理の深層にこびりついている様々の記憶の断片をつつき出し、目ざめさせ、あるいはそれをめりめりと引き剝がしてゆくことに、痺れるような興奮を感じながらこの作品を読んだ。そして読みながら、こんな読みかたをしているものは、けっして私だけではないだろうと思ったのである。」と猪野謙二は書いている。そして「こんな読みかたをしているもの」が猪野だけでないことは、『真空地帯』に関する世評に明らかである。更に「近代文学」八月号に載っている白石徹の場

合などは、「こんな読みかた」のもっとも切実な例であろう。「一九四四年冬の一一一部隊——僕はそこを知っている。『木谷』が帰って来た『ホ隊』＝歩兵砲中隊に間近い兵舎の一棟に、『弓山』や『田川』や『安西』やと同じ『第一回学徒出陣兵＝初年兵』として僕はいた。そして、この、同じ『真空地帯』に、同じ時期に、作中人物のある人々と同じ資格で、現実に僕がいたこと、言いかえれば、一九四三年十二月から四月に到る約五ヵ月の間に、『木谷』や『曽田』をはじめ作中人物の全て、もしくは幾人かと、行きあう（或はそれ以上の）機会を僕がもっていたこと、いや、そう言おうより、寧ろ、個有名詞に於てこそ異なれ、彼等の殆んどすべてと行きあい、鮮やかな記憶の中に彼等の姿が今尚僕の前に立ちはだかっていることの故に、作品理解の上での若干の資格が僕に約束される以上に、その余りにもの切実さに禍いされて正当な判断が昏まされなければと思わぬでもない。」

白石徹の熱っぽい調子の中には、彼が『真空地帯』において彼の記憶にいまなおなまなましい軍隊生活中の諸人物に出あったときの驚きがこめられているとみてさしつかえないだろう。また「内務班の生活を一月ほどした経験を持つ」阿部知二は「群像」五月号の創作合評で、この作品を「あの日本の陸軍の兵営生活ないし兵隊生活の最も忠実な記録としてこの小説がわれわれの前に提出されているのみでなく、『曽田』『木谷』そのほかたくさん出て来る下士官、兵隊、またいくらか将校たちの人間が描かれている、つまり人間記録という点においても僕はこの小説に感心した。」と云い、それから少しあとで「僕が最初言った人間記録として描かれているという場合には、ここに出て来る十数人の者が全般的にいって人間記録として描かれて

いるということを言っていいかと思って、そういう表現をしたのですが、『木谷』の場合にはじつは僕は退屈になったときもありますね。」と補足訂正的説明を加えているが、とにかくこの作品が日本軍隊内の生活の「忠実な記録」であるという点に大きな価値を認めていることにはまちがいがない。また同じ合評の中で、海軍の兵隊生活を経験し、自身たくさんの兵隊小説を書いた梅崎春生も「内務班の中に動いている下士官や兵隊の姿というものは非常によくでていますね。これほどピタッと兵隊の体臭を書きわけた小説というものは今まであまりなかったように思います。」と云っている。

しかし、軍隊生活をした人たちが自分の体験と照し合せて、この小説に書かれた人物や場面の正確な描きわけに感心しているばかりではない。軍隊生活の経験をもたぬ人たちも同様に、この小説を軍隊生活の忠実な記録として評価している。

「真空地帯と名づけられたこの内地の戦時軍隊生活では（戦線における一種の自由さがないだけに）、極度に封じこめられた状態の中で、人間の欲望、野心、権勢心、社交、媚び、闘争欲などが、もっとも露骨な形をとってぶつかりあう。それらの特殊運動の精密な力学的関係をつかんだのがいちばん見事なこの作のてがらで、」「書かれていない日本陸軍の全様相がこれでうかがわれる。」とそうした評者の一人として手塚富雄が書いている。これに類した批評は他にも数多くあり、軍隊生活どころか、団体生活というものの経験をほとんどもたぬわたし自身も同じような紹介文を書いた。分りきったことだが、とにかく、同じ経験のないものにまで、真実の印象を与えるということは、この小説の芸術的勝利と云えよう。

しかしまた、この小説に与えられる評価が、おおむね日本陸軍の内務班の忠実な記録であり、軍隊の機構と兵隊の姿をこれほどまざまざと描きだしたものはないという点に主として向けられ、この小説を貫くテーマについてはほとんど触れていないということも特徴的な事実である。もっとも、これはこんご現れるべきものかも知れない。特に作者の野間宏が「かきたかったことは、知識人と革命家の責任ということであった。」と制作動機を説明している。その点については、花田清輝の短い批判以外はわたしの目に触れない。そして、その点に多くの批評が触れることなく、もっぱら軍隊生活の忠実精密な文学的記録として眺められ、そのようなものとして評価されるところに、作者の意図の圏外で読者にうったえかけるこの作品の客観的性格が示されているのかも知れないが、作者による作品世界、作中人物の把握仕方、作品の動いて行く方向、即ち作者によってなされたテーマ設定についての検討を除外するなら、一個の作品理解として不充分のそしりを免れることはできないだろう。自己の体験に照らして作品の真実性をさぐり、或はまた飯塚浩二の『日本の軍隊』という分析的研究や、丸山真男や遠山茂樹その他の学者の研究や、またルース・ベネディクトの『菊と刀』に摘出されている日本人のメンタリティの特徴と対比して『真空地帯』の個々の人物や場面や事件がどれほど精確であるかを調べてみることは無意義ではない。また学者が『真空地帯』から日本軍隊研究のための素材をたくさんひきだして来ることも可能であり、意味のない仕事ではない。だが、それだけでは一個の文学作品としての『真空地帯』を充分に読みこんだとは云えないのである。

以前に、年下の友人と話しているとき、『真空地帯』のことが話題にのぼって、わたしが、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

あの中の安西という学徒兵を作者はひどく残酷にやっつけているようだが、あれはもっと同情的に描くべきではなかったかと云ったのに対し、軍隊に行ったことのあるその友人はいかにも腑におちないという態で、それはあなたが兵隊に行った経験がないからですよ、安西みたいな、ああいったいやらしい奴が本当に軍隊にはいます。ああいう奴を見たら、ちっとも同情出来はしませんよ、と反駁したことがある。

事実と文学的真実との混同は、殊に『真空地帯』のような作品においては起りやすいものだ。従って、いま一度世評からこの作品を文学的に洗いだす必要があり、それは作者にとっても読者にとっても必要な時期に来ているような気がする。

結論から先に言えば、この小説は、第一に細部においては具体的でありながら、総体としては抽象的である。第二に作者の意図したテーマから云えば、これは一個の転向小説である。もちろん昭和八年頃からしばらくの間、わが文学界に氾濫した転向小説とは、転向の方向において全く逆の方向をとった転向小説であるが、しかもなおわたしは最も徹底した転向小説の一つと考えられる島木健作の『生活の探求』との類似を感じないわけには行かなかった。テーマ設定における作者の観念性において両者は共通しているが、『真空地帯』を芸術的に救っているものは、ディテールの端々にあらわれた強烈なリアリティであり、観念性を出来るだけ抑制しようとした作者の方法的努力である。

『真空地帯』にはすぐれた描写がたくさんある。殊に曽田の眼を通してすべてが眺められる

ようになる第三章の前に、即ち発端から第二章――更に云えば第三章のはじめの曽田が木谷と馬を走らせるところまでに、すぐれた場面がある。ディテールの真実さはしまいまで失われることなく保たれていることはいるけれども、発端から第二章まではディテールの組み合せや場面全体としての動きが緊密であり、そこに何の不自然も感じられないという意味で、後半の曽田の眼を通しての図式的・観念的な解釈が混入してくる場面と比較して、すぐれていると云える。つまり第二章までの展開部、作者が「真空地帯」と名づける陸軍一一一部隊ホ隊の内務班の様相が読者に紹介され、曽田とか木谷とか安西とか主要人物たちの輪郭もまだはっきりせず、それらの人物たちもただ内務班を構成する一員として全体の中にとけ合わさったまま描き出される部分において、この小説のもっとも見事な、ほとんど間然するところのない構成と描写が見出される。

「ほんまに初年兵の野郎この頃、なまけてやがる……よし今晩、あいつらバッチや」「泣かす、わあなかす」「おすけ野郎」「あほんだら、出直してこい」「おんどれりあ、また、気合ぬかしてけっかるな」……等々の軍隊用語が跳ね踊っているのもこの前半である。初年兵いじめの場面も眼をおおわしめるものがある。「木谷は吉田軍曹のあとについて、二階の内務班の方に上って行った。廊下の銃架には銃が長く冷く並んでかかっていた。谷間のようにくらいへこんだ部屋には、既に毛布を四つ折にしてたたんで置かれた寝台がならんでいた。油の匂い……重い冷い匂い……木谷はまた帰ってきたと思った。……階段を上りきった右手にならんだ二つの班長室の左手、一班、二班の班長室で吉田軍曹は事情をきき取ったが、彼は木谷に何年いた

のか、苦しかったろう……給与はよかったか……中隊もかわったろう……などと簡単なことをきいたきりで、その点にはなるべくふれないようにしていた。彼は班長室のなかをせかせかと机から机へととびまわった。『なんだい仕様のないやろうだな……大滝伍長のやつ、ひとのクリームをだまってつかいやがって、あとはほっとらかしにしてしまいやがる……。ああ、このざまは、……パンにこんなにジャムをぬりたくりやがって……。』隅の机の上にはパンの腹に赤いジャムをねっとりつけた塊がすててあった。」

これはほとんど映画的な、すぐれた導入部だ。ここで班長たちの関心が、刑務所からかえってきた木谷よりも、用品や食べものの上にあり、アランが戦争のメカニズムについて語った言葉を用いれば、「『真相』はほとんど一つの職業にすぎない。」ところの、軍隊生活のメカニズムが、一閃に照らし出される。ついでに敗色の漸くあらわれはじめた頃の軍隊内の規律の弛緩と、頽廃の雰囲気の先ぶれともなっている。人物たちの何気ない言葉や挙措動作のうちに、その人物のかくされた欲望や真の関心、性格や職業がその人に賦与する特徴等をすばやくつかむことにこの作家は実に巧みであり、その手腕は『青年の環』の市役所の場面などに効果的に発揮されているが、この作品の主たる魅力も、全篇をおおうディテールの端々にみられるこの把握仕方にあるといって過言ではない。

ところで、ぎっしりつまったこの尨大なディテールは何によって支えられ、いかなる角度から照明を与えられ、どのような論理に導かれて一つの主題にまで結晶させられているだろうか。

卒直に云って、この点に関しては極めて不明瞭かつ曖昧であって、わたしは明確な作者の視点を摘出することができない。それと思われるものを、いくつか指摘することはできるけれども、これこそ真の究極的な視点であると言いきれるほどはっきりしたものは摑み得ないのである。個々のディテールの取扱いにおいて、しばしば前後矛盾する扱いかたに接すること（例えば、最初に出てくる「ほんまに初年兵の野郎この頃、なまけてやがる……よし今晩、あいつらバッチや」と、おわりの方で染が安西のことを「あんなやつ、あのままにしといたら、ためにならしまへん」というときの響きのちがい。しかも初年兵に対する制裁という点では同じ内容をもっているにも拘らずである）、また例えば、「人間のなかから無残にもあらゆるものをあばきたてる軍隊に対する憎しみと共に、彼等大学生に対する嫌悪感が湧き上ってくるのをふせぐことができなかった」曽田の二重感情の未分性と曖昧さ、しかもその曽田の二重感情がこの作品の全体を貫く作者の強いモチーフとなっていることの曖昧さ。もちろん、それは、大学生たちに自己を失わせ、弱点をあらわにさせる原因と責任が軍隊の制度にあるか、それとも大学生たち自身の弱さやだらしなさにあるかをはっきりどちらか一方に整理して示すべきだということではない。むしろ強力な外的圧力と内的弱さとの関係を有機的統一的に摑むための、明確で堅固な視点を作者が欠いていることによるのではないかと思われる節々があるということである。総じてこの作品では、作者によって意味づけられる以前の具象的なディテールの即物的描写がすぐれ、そのようなところで作品は潑剌と生きているが、曽田の眼を通してそれらのものの意味づけがはじまると、とたんにディテールが色褪せ、干からび、不自然にさえなってく

ることに注意ぶかい読者は気がつくだろう。もちろん、作者は充分に用心して、観念をあらわに示すことを極力避け、つねに具象的なディテールの描写と、具体的な内容をふくんだ会話によって観念を抑制すべくつとめている。その点にこの小説の大きなてがらがあるといっていいが、しかし他方から考えれば、そのように観念を抑えなければならなかったことは、その観念がディテールの具象性と融和しがたいものであること、云いかえるなら、ディテール自体の中に生きて働き、ディテールを積みあげて一つの全体を構築することのできる、いわば建築における力学的法則の如き観念ではなかったことを示すものではないだろうか。

その意味で、この作品を下から支えている濃密なディテールは、一向に構築物として起きあがってこないで、いつまでも単なる堆積として止まっている。全体としての内務班内の生活、士官、准尉、下士官、古年兵、初年兵、学徒兵のそれぞれの関係、その間に生ずる残忍酷薄な葛藤を通して、軍隊のメカニズムは或る程度みごとに描き出されているが、メカニズムはメカニズムとして静止したままであり、少しも動かず発展もしない。恐らくこの作品はその末尾をそのまま発端に戻して結びつけてもさして不自然ではないだろう。木谷と曽田との間にのみ存在するテーマの発展は、それ自体として全体から孤立し、木谷の存在も木谷の秘密も木谷の事件も、内務班内の生活を少しも波立たせることがない。わたしにはこの作品は、建ちかけの家のように思われる。土台が出来、壁も塗ったが、屋根が葺かれていない家、そして、がっちりした瓦屋根のかわりに、ヨシズかアンペラで間に合わせた家——。

そして、このことは、作者がここに描いた内務班を、また軍隊一般を「真空地帯」として表

象したことに関係している。

「兵営ハ条文ト柵ニトリマカレタ一丁四方ノ空間ニシテ、強力ナ圧力ニヨリツクラレタ抽象的社会デアル。人間ハコノナカニアッテ人間ノ要素ヲ取リ去ラレテ兵隊ニナル」

これは曽田の「兵隊論」である。作中人物の考えを直ちに作者自身の考えととり違えることは、つねに注意して避けねばならぬ事柄であるけれども、作者は曽田の「兵隊論」に一言の批判の言葉も述べていない、それどころか、曽田の感想として そこから引き出される「真空地帯」という定義をそのまま作品の標題としている点からみれば、この曽田の兵隊論は同時に作者自身のそれであると考えてさして間違いはないだろう。この「兵隊論」には多くの読者がひっかかった。曽田はこの「兵隊論」を、たまたま公用外出中に娑婆の人間を見たときに想いだす。そして「彼等の足はしばられてはいなかった。彼等には部隊の紐がついてはいなかった。しかし曽田の足をしばっているのは、歩兵操典の条文であり、曽田の眼をしばっているのは陸軍礼式令の条文だった。」と考え、「そこでは屋内で帽子をかぶることは許されないが、屋外へでるときは帽子なくしてでるということはまた許されない。これは一つの強制せられた社会である。そこではまた起床後より夕食時限までは寝台上に横たわることを許されないが、これは人間の自然をうばい去ることである。」従ってそれは「人工的な抽象的な社会」である、「ひとはそのなかで、ある一定の自然と社会とをうばいとられて、ついには兵隊になる。」と考える。ところで娑婆対兵営という対比仕方、兵営を娑婆からきりはなされた特殊地帯として表象する仕方は、もっとも常識的な通念に従ったやり方であり、この通念に一部の真理があることは事

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo